

変

てんちゅうぐみ 天忠組

神主・奈良県立大学客員教授

岡本彰夫

OKAMOTO Akio



おかもと・あきお
1954 (昭和 29) 年奈良県生まれ。國學院大學文学部神道科卒業後、春日大社に奉職、春日大社権宮司 (2015 年退職)。奈良県立大学客員教授、宇賀志屋文庫庫長。著書に『日本人よ、かくあれ』(ウェッジ) など多数。

今年令和五年は「天忠組の変」がおきて、百六十年を迎える。

十年前迄は、事の発端となった五條市や、終結を迎えた東吉野村を始め、関連の市町村で真摯ながらも、ささやかな催しをされていた。

新選組を知らぬ人はいないが、およそ奈良県下でも天忠組を知っている人は極稀で、人の集まりも悪く、残念な状態であったと思う。

今何故に天忠組なのであるのか。何故に天忠組に世に問わねばならぬのかを考えた時、三つの言葉が思い浮かんだ。一つ目は「利他」である。新選組は縁を喰んだが、天忠組は今でいうボランティアで、幕末騒乱の時に当たって、暴拳には過ぎるが、身を捨てて国家社会の為に事をなそうとした志は、現代に生きる我々も学ばねばならぬ事であろう。勿論当時、この暴拳を

鎮めようと、立ち向かった各藩の武士の働きも同様に評価すべきである。二つ目は「責任」である。昔は責任の所在が、はっきりとしていた。例えば襲われた五條代官所の木村勇次郎は、手負いの身を以て代官所から己が妻子を救い出し安全な所に隠して、知己の氏家に身を寄せたが、天忠組の探索がこの家に及んだ時に、掛かる仕打ちを恐れて、我が身を川原に捨てさせて、天忠組に連絡させ、果てたという人である。また勅命と偽って参加を強要した、十津川郷士は八月十八日の政変によって、逆賊と化した天忠組と決別する際、野崎主計一人が責めを負い、割腹してその罪を詫び、十津川郷士には何の責めも及ばなかった等々の責任に対する重い覚悟を持っていた事。それに対して今の世の中はどうだろう。責任の所在は曖昧で、人や社会のせいにする。責任逃れの見苦しい政治家や経営者の

振る舞に辟易とした事件は耳目に新しい。そうして三つ目は「再生」だ。今以て天忠組の志士の倒れた場に、香華を手向ける老人がおり、山中しめやかに供養の法事が営まれ続けている。昭和二年八月頃、吉野の山中を調査に訪れた、彼の有名な民俗学者・宮本常一は、その著『御一新のあとさき』に天辻峠の地藏堂の蔭に憩う八十歳近い老婆から「それでもまア、この土地の人は、天忠組に義理立てていましたから、あの後しばらくは村にもよいことがつぎきました。天忠組にたてついたようなところには碌なことはなかったといえます。」との談を録している。若くして散った人々への哀れみや追慕の情であろう、事件後すぐに幕府の目をばかりつつ、「天忠踊」が近年迄盆踊りとして伝えられて来たが、絶滅の寸前と化している。以上の三条を以て、今の世に問う事とし、五條市、

十津川村、東吉野村、安堵町の四市町村に呼びかけ、天忠組関係市町村連絡協議会を立ち上げ、以降協力して啓発活動を行うこととした。十年前には映像作家保山耕一氏に依頼して、天忠組の素晴らしい映像を制作し、事件の顛末と、地元の方々の思いを録画して東京を始め、志士に縁ある土佐でも上映を行った。

識者からも「批判はあったが、今何故に天忠組かは、世界の状況下、再度我々が歴史に学ぶ必要ありと、信念を貫いている。

尚、天忠組とは自ら名乗ったもので無く、誰言うとなく称えられた名称で、多く「天誅」を用いたが、陣中の書記方を勤めた、伴林光平は「天忠組」と記しているし、立て初めし志を以てしても「誅」より「忠」が好ましいと、「天忠組」と表記していることも、申し添えたい。



上：旧五条代官所長屋門（現・五條市立民俗資料館）
下：天誅組150年記念碑
（ともに五條市立民俗資料館提供）